

対談 自由、気ままに、コラム執筆

「人生を変えたいなら、まず『書く』ことからはじめますか」

「人生を変えたいなら、まず『書く』ことからはじめますか」。ある本の帯に書かれた、何とも気になる誘い文句。「書く」ことで何がかわるのか、この誌面でコラム執筆を担当する2人に聞いた。

—なぜ、文章を書くのが好きなんですか。

みなと：なかなか言えないことを言葉にできるのがいいですね。私は話すのが得意じゃなくて。でも、文章だったらそれができるので。

木瀬：今でこそ好きですが、少し前まではあまり好きではなかったんです。学生時代なんか、作文が嫌でした。でも、この広報誌を制作するセミナーでコラムを書いたら、なんと褒められたんです。それでかな。承認欲求が強いですよ。—どんなときに書きたいと思いますか。

みなと：自分が考えていることを形にしたいとき、アウトプットしたいときかな。言いたいけれど本当に言っちゃうと角が立つけど、文章にしちゃえば意外と平気なこともあって。でも、コラムには書きません。フィクションとして小説に書きますね。

—これまでのコラムで、自分の悩みを書いたことはありますか。

みなと：ありますね。ある程度公開してもいい悩みっていう限定つきですが。コラムでは結論を出さなければならないので、悩みに対して一応の決着をつけます。簡単にはまとまら

ないことは、もちろんあります。そんなときは、ポップスの歌詞の中から「これかな」という言葉を見つけることもありますね。

木瀬：私も自分の悩みを書いたことはあります。悩みのレベルでいえば、5段階で2くらいまでのものです。3以上は重すぎて出せません。

—書いてみて、その悩みに変化はありましたか？

木瀬：ないですね。でも、スッキリはした感じはあります。私の場合、自分というよりも同じ悩みを持つ人に対して共感してもらえればいいなという思いです。

—「人生を変えたいなら、まずは『書く』ことから始めてみませんか？」という提案をどう思いますか。

みなと：書くことが好きな人は、それでいいと思います。でも、要はアウトプットすることが大切だと思うんです。絵だったり工作だったり、人により何でもいいと思います。私の場合、悩んでいるときに他の人からのリアクションが欲しくないんです。一方的にアウトプットしたい。誰かに相談したとしても、その人のリアクションが気になってしまうタイプなんです。

木瀬：それで人生が変わる人もいれば、変わらない人もいます。私の場合、自分の悩みについていえば、書くことではなく人との会話によってそれを解消していく感じですね。もちろん、誰に話すかは大切です。

コラム「自問自答」 (筆者：みなと)

菅田将暉さんの「まちがいがし」という曲がある。この曲の歌詞と同じように、私も間違いの方に生まれてきた気がする▼もし正解の人生に生まれていたらどうだろうか。毎日楽しく学校に通い、友達がたくさん。部活で青春を謳歌し、彼氏とカラオケデートして友達と制服デイズニー。リア充なキャンパスライフを送り、就職して職場結婚。実家の近くに家を建てて、子供は男の子と女の子が1人ずつ。素晴らしい正解の人生だ▼ただ、私は現実逃避でオタクになった。こんな真つ当な人生を歩んでいたら、オタクにはならなかったかもしれない。大好きなあの作品にも、夢中になったあのキャラにも、尊い推しにも出会えなかったと思う。推しがいない人生、そんなものが果たして正解なのだろうか▼なんて妄想していると、間違いか正解かなんてどうでもよくなる。私の人生には推しがいないと、ただ強く思うだけ。

コラム「自問自答」 (筆者：木瀬)

失敗はSSR級のイベントだ。大半の人が成功するために努力しているのであり、失敗しようと動いている人はほとんどいない。だから失敗という経験は実はレアであり、容易にできることではない▼友達作りをするオフ会に参加してみた。なけなしの3,000円をはたいたからには友達を作らなければ。そう意気込んでいたのも束の間。人見知りなのも相まって私の席だけお通夜ムードに。他の参加者たちが連絡先を交換しているのをよそ目にそそくさと帰宅した。顔が熱くなるのを感じた▼せっかく都内まで赴いたのに友達一人も作れなかったので損した気分になった。しかし、よく考えてみると私にとって多くの人が集まる場は合わなかったのだ。それを3,000円で勉強させてもらったのだ。安いと捉えるかは人それぞれだが、金を出して成果が出なかったという経験は簡単にはできない▼野口英世がドロンしたお財布は静寂に包まれている。少々大きな買い物をしてしまったようだ。

インタビュー くま子の部屋【第1話】チャレジョブセンター熊谷・武藤施設長

自然に親しみ、アルバイトに勤しんだ学生時代

—学生の時、川でメダカをつかまえて遊んでいたそうですが。

「友達とたまたま川に行って、足元にあったアイスクリームのカップですくったという感じですね。利根川も上流に行くともメダカがいるほどきれいでしたよ。」

—外で遊ぶことが多かったんですか？

「野山を散歩するのが好きでしたね。クマにも遭遇したことがありました。びっくりして逃げましたけど。」

—ゲームとかはしなかったんですか？

「してましたよ。テトリスが好きで、はまりましたね。100面クリアするまで熱中しちゃって。」

—バレーボール部では、東洋の魔女と呼ばれていたとか。

「東洋じゃなく東毛の魔女ね。東毛という地域だったんで。背が高いので、そんなふうに言われたこともありました。」

—大学生の時はアルバイトにはまっていたそうですね。

「バイトばかりしていたという感じですね。」

—どんなアルバイトをしていたんですか？

「お茶屋さん、洋品店、焼肉屋、データ入力などなど。変わったところでは、神社の巫女さんもやりました。結婚式の

時、神主さんの横で御神(おさかき)を渡す仕事です。ここだけの話、なかなか割のいい仕事でしたよ。それはともかく、接客の仕事が多かったかな。お客さまが欲しいものを探り、商品の良さを伝えるというのは、おもしろかったですね。先輩を見て「まねをしてみる」というのが勉強になりました。」

—なぜ今の仕事を選ばれたんですか？

「パソコンも好きだし教えることも好きでした。あと、就職を支援したい思いもあって。この条件で探していたら今の仕事に出会いました。はじめは職業指導員という仕事でした。」

—仕事に取り組むうえで心掛けていることは何ですか？

「前向きに考えていくということですかね。新しいことに関心を持ち、本を読んだり、調べたり、場合によっては資格を取ったり。」

—あこがれたりしている人はいますか？

「うーん。100歳くらいのお年寄りが元気に生きている姿を見ると、尊敬しちゃいますね。あーいうふうになりたいなーって。」



名言との対話 あなたの悩み…あの人だったら、どう語るか

「何をやってもダメなんじゃないか」と思ってしまう

—自分に自信がありません。趣味でギターを弾くのですが、ちっともうまくなりません。できないことばかり増えていく気がして、何をやってもダメなんじゃないかと思ってしまう。

旅人A：思うようにいかないことが続くと、好きなことでも手につかなくなってしまうことはありますよね。めげないことで有名な芸人さんでさえ、こう言っています。

芸人E：どんなに美しい夢であっても、かなえられぬ者にとっては悪夢だ。

旅人A：中途半端になぐさめられるよりも、響きますね。でも、この芸人さんは、こんなふうにも言っています。

芸人E：明かりがないなら窓を開けよう。少なくとも暗くはないはずだ。

旅人A：できないことにばかりに目がいき、いわば「お先真っ暗」と思い込んでいたのかも。窓を開けて光を入れれば、できていることが見えてくるかもしれませんね。

旅人B：どんなことがあっても前進しようとして負けないことも大事だと思うんです。後ろを振り返って戻ってもいい

と思う。できていることを見つけて、そのできたことを泥臭く、続けていく。それが「基礎を固める」っていうことかもしれない。

旅人A：古代ローマ5賢帝のひとり、マルクス・アウレリウスは、不得意なことでもさえも習熟できると言っていますね。

アウレリウス：たとえ達成不可能なことだと思われることであっても、習熟することが大事だ。右手が利き手の人にとっては、ふだんあまり使わない左手は不器用なままだろう。だが、馬に乗って手綱を握る際には、右手より左手の方が力強く握っているはずだ。それは

左手が習熟してきたからだ。

旅人A：たとえうまくできなくても、これまで続けてきたという実績は、並大抵なことではないと思います。

旅人B：平凡を日々続けることこそ、まさに「非凡」なことですよ。



窓を開けてみよう。きっと明るくなる。